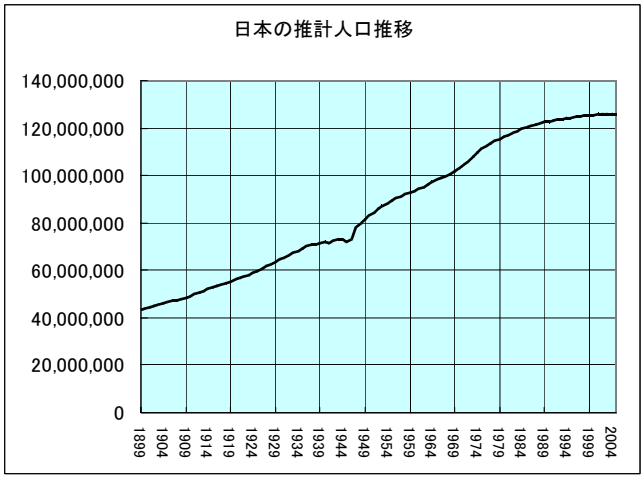
第2回　日本の人口動態:出生と死亡

日本の人口は、移動による変化がほとんどないので、基本的に出生と死亡によって変化してきた（戦前は、植民地への移動や植民地からの移動も見られたが、以下の統計は、植民地の人口を差し引いている）。

1. 日本の人口推移

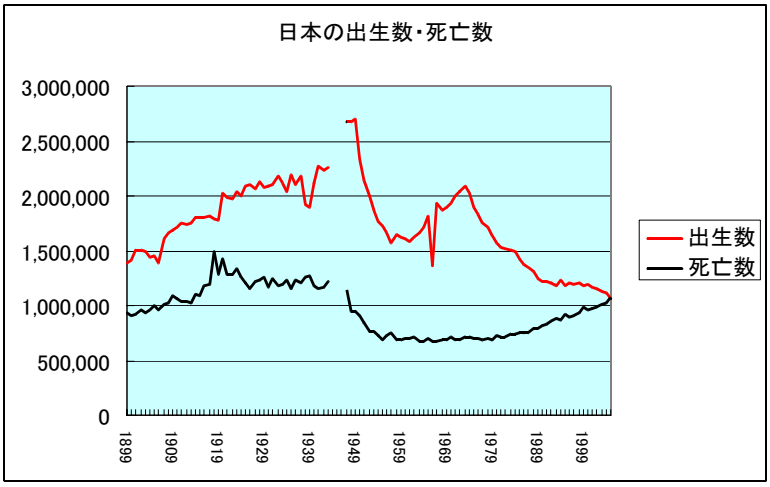
厚生労働省人口動態統計による人口推計

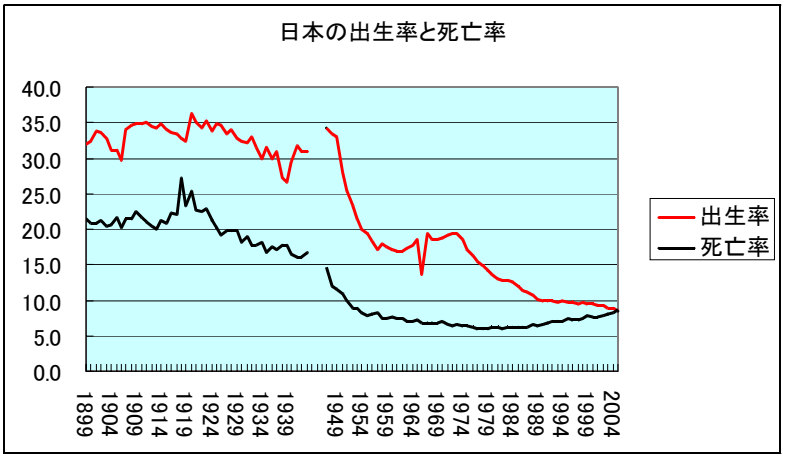
・太平洋戦争末期に、人口が停滞ないし減少したが、その後は、1980 年代まで増加。
・1990 年以降、伸びが止まり、2005 年には減少に。



●出生数と死亡数

人口の増減は、移動を度外視すると、出生数－死亡数できまる。





資料）厚生労働省人口動態統計

・**出生率**：人口千人あたりの出生数。

・**死亡率**：人口千人あたりの死亡数。

この指標は、年齢構成を無視しているが、計算がしやすいので、古くから用いられてきた。現在でも、国際比較ではよく使われる。年齢構成を考慮に入れた「合計特殊出生率」（後述）は、近年、日本でよく用いられている。

2. 出生数および出生率の変化

・1920 年代から出生率は減少傾向にあった。

・戦後のベビーブームは、年間 260 万人の子どもが生まれていた。日本史上、最も子どもがたくさん生まれた時代。

・その後、出生率は急速に低下した。

・1966 年は丙午の年で、迷信により出生率が一時的に減少した。

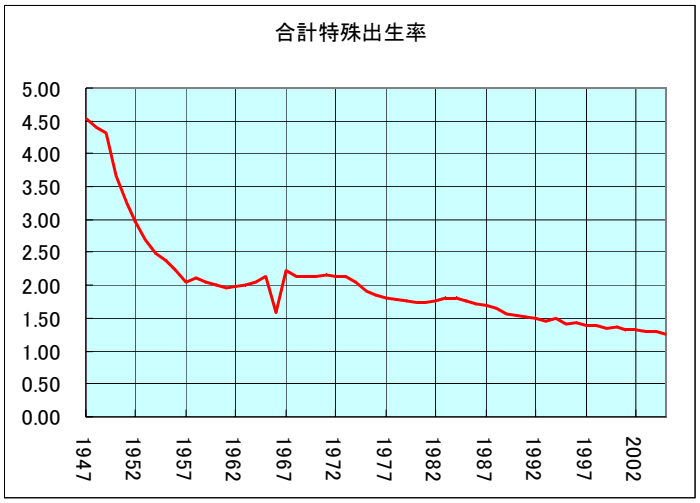
・その後、ベビーブーム世代が出産期をむかえたために出生数は増加したが、出生率は横ばいであり、1970 年代後半からは、出生数・出生率ともに急速に減少した。

・1990 年代には、出生率は 10.0 を下回る水準で横ばいになった。→少子化。

・2002 年の世界全体の出生率は約 22 ‰。アフリカは 38 ‰、ラテンアメリカ 23 ‰、アジア 20 ‰、ヨーロッパ 10 ‰、北アメリカ 14 ‰。

●合計特殊出生率（TFR）

女性の年齢別出生率を 15 ～ 49 歳にわたって合計した数値。その値は、女性がその年齢別出生率にしたがって子どもを生んだ場合、生涯に生む平均の子ども数となる。（特定の年に出産が集中したり、忌避されたりした場合にはこの解釈は成り立たない）。



資料）人口動態統計

・1970 年代前半までは、合計特殊出生率 TFR は、約２で、ほぼ人口を維持できる水準（**人口置換水準**）であったが、1970 年代後半から低下傾向にある。2005 年には 1.26 になった。この傾向が続けば、日本の人口は減少にむかうことになる。→少子化は 1970 年代に始まった。
・国際比較：韓国 1.08（2005 年暫定値）、シンガポール 1.24（2004 年）、イタリア 1.30（2003 年）、アメリカ合衆国 2.04（2003 年）。

3. 死亡数および死亡率の変化

・人間はみなやがては死んでいくので、人口が増加すれば、やがて死亡数も増加する。
・疫病、戦争、大災害などの事件で、一時的に死亡数・死亡率が増加することがある。
・1918 年、「スペイン風邪」と呼ばれたインフルエンザが世界的に流行。世界で 2500 万人、日本では 38 万人が死亡したと言われている。
・1944 ～ 45 年。戦争によって多くの死者が出たが、敗戦による混乱もあって、統計上は数値が出ていない。しかし、人口推計では、1944 ～ 45 年にかけて、100 万人以上減少している。（この直前の時期の出生と死亡との差が 100 万人であることから推計すると、1 年間に少なくとも 200 万人以上が死亡している。なお、太平洋戦争の日本人戦死者数は政府の発表では約 310 万人）。
・戦後は死亡率が急速に低下。1970 年代は６‰台に。（これは乳児死亡率の低下が寄与している）。
・近年になると、年齢構成の高齢化により、死亡数・死亡率が増加。死亡率は８‰に。
・出生数と死亡数がほぼ同数になり、人口減少局面に。
・2002 年の世界全体の死亡率は９‰。アフリカ 14‰、ラテンアメリカ６‰、アジア７‰、ヨーロッパ 10‰、北アメリカ８‰。

●乳児死亡率

ある年の 1 歳未満の死亡数（乳児死亡数）をその年の出生数で割って千倍したもの。
乳児死亡数÷出生数× 1000

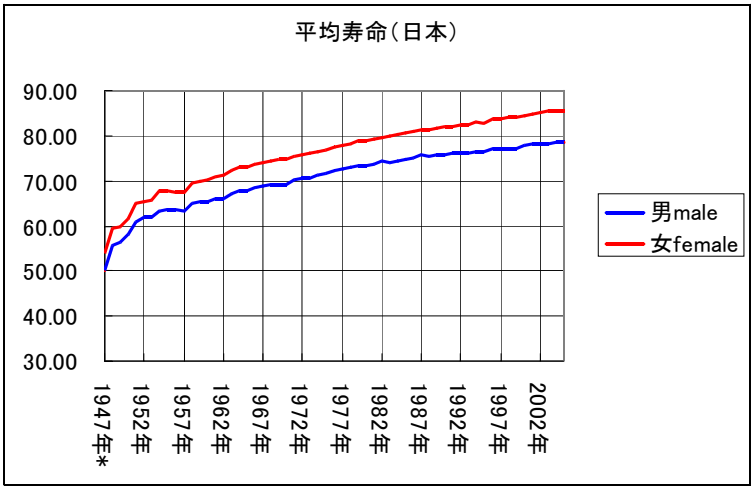
資料）厚生労働省人口動態統計

・1920 年代から乳児死亡率は低下しはじめ、1920 年の 165.7 ‰から 2005 年には 2.8 ‰になった。ちなみに、2002 年の世界の乳児死亡率は、55 ‰。アフリカが 88 ‰、アジアが 54 ‰、ヨーロッパでは８‰、北アメリカでは７‰。
・日本の乳児死亡率は、世界最低水準に達している（シンガポール 2.0[2004]、スウェーデン 3.1[2003]、イタリア 4.6[2003]、アメリカ合衆国 6.9[2003]）。

・乳児死亡率の低下は、平均寿命（0 歳児の平均余命）を増加させる。

●平均寿命

平均寿命は、年齢別死亡率から算出した 0 歳児の**平均余命**である。



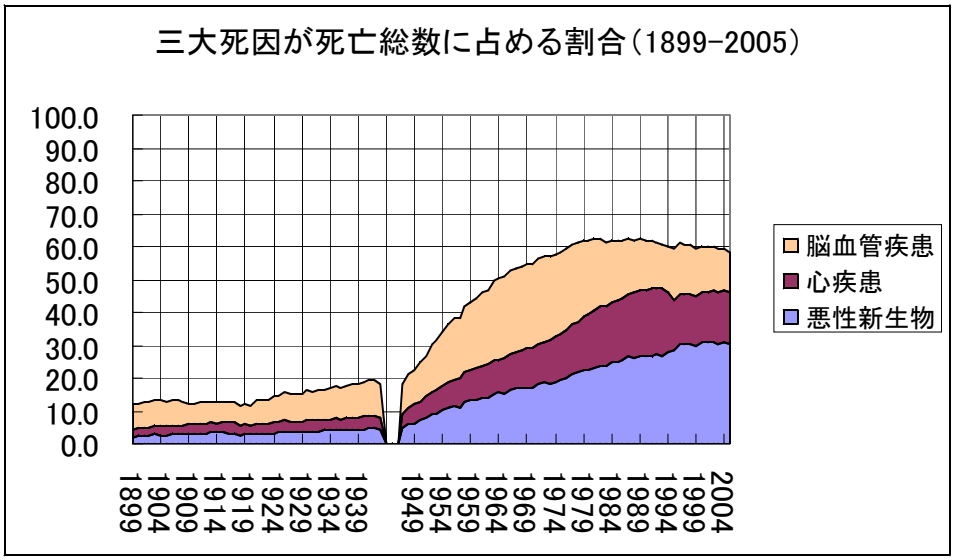
資料）厚生労働省平成 17 年簡易生命表

・1950 年に男性 58 歳、女性 61.5 歳だった平均寿命は、2005 年には、男性 78.5 歳、女性 85.5 歳に。女性は世界一、男性は香港、アイスランド、スイスに次いで世界第 4 位と思われる。

・アイスランドは、男性 78.9 歳、女性 82.8 歳（2001−2005）。
スイスは、男性 78.6 歳、女性 83.7 歳（2004）。
香港は、男性 79.0 歳、女性 84.7 歳（2004）。
イタリアは、男性 77.1 歳、女性 83.0 歳（2002）

米国は、男性 74.8 歳、女性 80.1 歳（2003）
英国は、男性 76.3 歳、女性 80.7 歳（2002-2004）
韓国は、男性 73.9 歳、女性 80.8 歳（2003）
中国は、男性 69.6 歳、女性 73.3 歳（2000）
ブラジルは、男性 67.9 歳、女性 75.5 歳（2004）
インドは、男性 61.6 歳、女性 63.3 歳（1998-2002）
ナイジェリアは、男性 52.0 歳、女性 52.2 歳（2000-2005）

●疾病構造の変化



資料）人口動態統計

感染症による死亡が減少し、悪性新生物（ガン）、心疾患（心臓病）、脳血管疾患（脳溢血）による死亡が増えている（６割の人は、ガンか心臓病か脳溢血で死ぬ）。これらは死亡原因の 3 位までを占めている生活習慣病である。

1990 年以降「心疾患」が減少しているように見えるが、これは死亡診断書に「死亡の原因欄には、疾患の終末期の状態としての心不全、呼吸不全等は書かないでください」という注意書きが付け加えられたためと考えられる。

4. まとめ

・日本の人口は、増加局面から減少局面に転換し始めている。

・1920 年代から出生率は減少傾向にあった。しかし、1970 年代までは死亡率も減少傾向にあり、出生数が死亡数を上回っていたために、人口は増加した。

・1947-50 年、ベビーブームは、日本で最も出生数の多い時代であった。1970 年代、第二次ベビーブームが過ぎてから、出生数・出生率は、急速に低下した。1970 年代以降、合計特殊出生率も、減少傾向にあり、少子化が顕著である。

・死亡率は、1970 年代まで減少傾向にあった。その大きな要因は、乳児死亡率の減少にある。また、感染症による死亡が減少し、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患による死亡が増えている。平均寿命は、1950 年以降、増加傾向にある。しかし、人口構成の高齢化によって、1980 年代から徐々に死亡数・死亡率は増加傾向にある。

・出生数の減少と、高齢化による死亡数の増大によって、日本の人口は減少局面に転換した。